特集

女性の力を発揮する

女性の感性が新時代を築く鍵
新たな地球社会を生み出す
グローバル人材を育てたい

辰野まどか　一般社団法人　グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）事務局長

英語嫌いだった少女が17歳の時に経験した出来事をきっかけに、世界中を駆け廻るようになった。彼女がこれまでしてきたことを聞いている内に、平和な世界の創り方が少しずつ分かって来たように感じた。

私の原点となった相馬雪香さんの一言

――17歳の時に世界を意識するようになった出来事について教えて下さい。

辰野　きっかけはMRA（現IC）という団体がスイスのコーという場所で主催した国際会議でした。戦争の時代が終わり、これから世界の平和をどのように創って行くかを話し合う会議でした。

私は中学・高校時代は英語が大嫌いでした。私の通っていた学校は私立で、同級生の多くは小学校から英語教育を受けていて、中学から入った私は既に落ちこぼれ状態でした。そこでもう英語は放棄して、「日本人たるもの日本語が話せればいいんだ」くらいに思っていました。

そんな中、17歳の誕生日に母が「すごい誕生日プレゼントを用意したわよ」と言うので、何だろう？　とワクワクしていると「スイスへ一人で行ってらっしゃい」と言われMRAの国際会議に3週間出席することになったのです（笑）。

会議は、世界中の政治家やビジネスマン、先生、宗教人などが参加する大人達の会議だったので、17歳の私は、「参加者の子ども」の体で参加しました。

辰野まどか（社）グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）専務理事／事務局長
神戸生まれ。学生時代に世界100都市以上を訪れ、様々なプログラムで自らを実験台に、地球市民を育成する「グローバル教育」を体験する。コーチング専門会社勤務後、米国大学院に留学し、異文化サービス、リーダーシップ、マネジメント修士号取得。その後、米国教育NPOにおいてグローバル教育コーディネーター、国連WAFUNIF主催「平和文化会議」コーディネーター、内閣府主催「世界青年の船」事業コース・ディスカッション主任等を通して、世界各地で多国籍チームとグローバル教育を実践。これまでに訪れた国はおよそ50カ国。2012年12月よりGiFTを立ち上げ、地球市民（グローバル人材）育成推進のための活動を開始。
株式会社ドアーズ　プロフェッショナル・パートナー　明治学院大学国際学部国際キャリア学科非常勤講師（サービスラーニング担当）

国連が政策を話し合う場であれば、私達は心の平和について話し合って、世界で起こっている様々な問題を解決して行こうと、都市問題や環境問題などを、毎日話し合っていました。

当然英語はほとんど話せなかったので、「私は英語が話せないんです」と言っても「じゃあフランス語が話せるのね」と言われて、どっと話しかけられたりと、逃げ場が無く、当時の私としては修行と言うか苦行の日々でした。

会議の中で、終戦を記念する意味で日本の神風特攻隊を題材にした映画が上映されました。それを観たある外国の婦人が号泣していて、その泣いている理由を尋ねると「日本兵が私達と同じように、恋人を持ったり、家族を想ったりする普通の心を持っていたことが分かったから感動した」と言うのです。

私としては「何言ってるの。当たり前でしょ！」という感じでしたが、当時はまだ日本のしてきたことが非難される時代でした。日本のことや

世界のこと、また日本が世界からどのように見られているかを、自分は何も分かっていなかったことを思い知らされ、またその現実にすごく衝撃を受けました。

3週間の日程が終わった時に、色んな国の人達で少人数のグループを作って感想を共有する時間がありました。私はそこで、「世界中の人が集まって世界の平和のために、毎日話し合いをするこのような場が今後もずっと続いて行って欲しい」と私なりに緊張って発表したのです。

すると、同じグループにたまたまいらした相馬雪香さん（難民を助ける会創設者。日本で最初にNGOを創った女性）が厳しい口調で「何言ってるの！　あなたが続けて行くんでしょ！」とおっしゃったのです。当時の私は17歳の最年少で、英語も話せない、何も知らない、何もできない自分でしたが、若い人達が受け継いで行かなければいけないという相馬さんのメッセージが強く心に残りました。

平和な世界への考え方が、人事から自分事に変わった瞬間でした。それが人生のターニングポイントとなりました。

国際会議に出席する17歳時の辰野さん

世界の人々との出会いが自分の枠を広げてくれる

――そこから日本全国の色んな人に会いに行くのですよね。

辰野　18～19歳の頃ですね。同世代の面白いなと思った人達には片っ端から会いに行きました。面白いのは、当時会ったり、一緒に活動していた仲間達が、今の社会起業や東北の復興支援などの分野で、日本の最前線を走るフロントランナーとして活躍しているということです。

そんな彼らと最初に出会ったのは、高校3年生の時でした。とにかくその頃は何かがしたかったのですが、学校が厳しくて、なかなかボランティアにも行けませんでした。そこで、ようやく迎えた卒業式の日に、友人はみんな夜パーティーをしようと盛り上がっている一方で、「ごめん、私今日からナホトカ号の重油回収のボランティアに行ってくる」と言って、手袋や長靴を持って一人夜行バスに乗り込み、新潟県に向かいました。

社会に対して何かをしたかったのですね。そういうところでの色んな人達との出会いが、その後の活動に繋がって行きました。

スイスから帰国した時に、日本よりもすぐ海外に出てしまえと思ったのですが、「日本を変えて行きたい」、「自分達がそれを創るんだ」と本気で考える若者達に当時たくさん会ったことで、「これは今海外に出たらもったいない。今面白い時代になっている」と考え、その人達と2年間

フィリピンでのプログラムのチームメンバーと記念写真

くらい色々活動しました。

――日本で活動した後、今度は人との出会いの場を海外に移しますね。そこで、自分の固定概念がどんどん崩されて行ったのですよね。

辰野　それが快感でしたね。最近では、あるプログラムの新たな挑戦として、フィリピンのセブ島に行きました。ロレガ地区というところに貧困層が多く暮らしているのですが、彼らは住む場所がないので、墓地に家を作って住んでいるのです。セブ島の人達もあまり近寄らない地域なのですが、そこに住む人々と一緒に新しい事業を創るというプログラムでした。

どのようなプログラムかと言うと、ダイアローグ（対話）を通して、全員が素の自分をさらけ出し、自己開示するという出発点を大前提として、どんな事業が出来るかを探って行くというものです。

3日間という時間の中で彼らと対話するのです。ただ彼らに「何をしたいの？」と聞くだけでは「お金が欲しい。仕事が欲しい」としか言ってくれませんでした。しかし自分達の人生を語り、そして彼らの人生を聞いて行くと、彼らは本当に家族を愛していて、自分が得をしたいとかではなく、家族を楽にさせてあげたい、子どもに教育を受けさせたいからお金が欲しいのだ、ということがしっかり分かるのですね。

私も今まで世界中で色んなプログラムをやってきましたが、自分の中で「それはしないぞ」と決めていても、正直どうしても「する側」と「される側」や、参加者とスタッフという意識の壁がありました。

しかし、そのプログラムでは、対話の中からある女性が「料理が好き」ということが分かりました。そこから地域のお母さん達と協力してカフェを作ることが決まり、地元にある会社とも協力でき今年の3月にオープンに至るまで、彼女達が主体となって実現することができました。

去年の12月に会った時には、すごくシャイでもの静かだったその女性が、今年の5月に会った時には、政治家のように堂々と前を向き、ロレガに住む仕事が欲しいと言っている人達の前で、「私達は彼らに仕事をもらったわけではない。一歩を踏み出せば夢は叶う。私達は夢を持っていいんだ！　不可能ということはない！」と話している姿を見て、すごい！　と思いました。

――現地の人達が仕事を与えてもらったという感覚でないというところが重要ですね。

辰野　そうです。そんな彼らに影響を受けて、私自身も、例えばGIFTを通じてもっと緊張らないといけないと思ってまた動けるわけです。

そういう風に、新たなプログラムに挑戦すると、「何も生まれなかったらどうしよう」とか「参加者に『何これ？』って思われたらどうしよう」など色々不安も伴うのですが、それでもちゃんと何か生まれて行くということを感じて、よい意味でまた価値観や自分の型が壊された気がしました。

現代の岩倉使節団を育てることが目標

――今後GIFTを通して、若い青年達にどんな経験をしてもらうことを望んでいますか。

辰野　私が事務局長を引き受けた時からメッセージは変えておらず、17歳の時に相馬雪香さんに「あなたが創って行くんでしょ」と言われたその世界観を如何に拡めて行けるか、ただそれだけです。色んな国の人、色んなバックグラウンドがある人達と共に、「どんな地球社会を創って行くのか」、「その担い手として何をやって行くのか」ということを話し合える機会を、様々な形でプロデュースして行くこと、それが一番やりたいことです。

今「グローバル人材」という言葉が流行っていますが、それらは企業人として戦うための人材という用いられ方をしていると感じます。それよりも私は、世界と繋がり、新しいものを色んな国の人達と一緒に創って、新たな地球社会を生み出せる、そんな「グローバル人材」を育てたいと思っています。そのための、イベントや研修を開催したり、奨学金によって若者を世界に送り出すという活動をやって行きたいです。

海外に行くことは誰でもできますが、ただ行って帰ってきて楽しかった、で終わるのではなく、重要なのはむしろその前後の取り組みによって、その体験をより価値のあるものにする（＝自分事にする）ことです。その部分がGIFTとして展開したいグローバル教育です。

そして最終的には、１４０年前に岩倉使節団が世界各地を廻って日本の礎を築いたように、今の若者達が世界に出て行き、次の地球社会のビジョンと世界観を創れるように促して行きたいと思っています。

――辰野さんの人生はまさしく色んな人との出会いによって切り開かれている印象を受けますが、辰野さんにとって「人と出会う」ということはどんな事ですか。

辰野　人と人が出会うことで、化学反応が起こったようにすごくエネルギーが生み出されるという経験をたくさんしてきました。自分が人と出会うことももちろんですが、人と人を繋げることは、よいものを生み出す場になります。その場を作って行く役割が私にはあるのかなと思っています。これからもそのエネルギーを感じ続けていたいです。

21世紀に求められる共存共栄の精神

――最後に、女性だからこそ発揮できる力は何だと思いますか。

辰野　私自身の世界観はすごく女性的で、「繋がり」とか「平和」とか「次世代」などをまず考えます。よく一般的にも女性は右脳（知覚・感性）が強くて、男性は左脳（思考・論理）が強いと言われますが、素の私は右脳的な感覚が強い、と感じています。

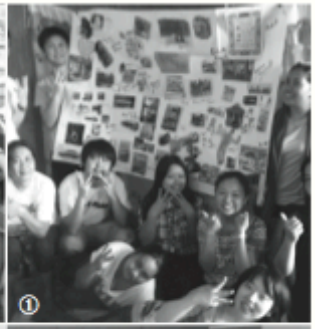
過去にビジネスをやっていた時は、左脳的な感覚を使って、如何に事業を戦略的に成功させるかを中心とした思考パターンでした。それも事業を継続させるためには大切な側面だと感じていますが、これから取り組んでいくように「今ここにない何か」を生み出すには、直感や出会いなどからどんどん繋がりを生み出して行く、右脳的な部分をより意識し、大切にすることが必要になると感じています。

20世紀は男性の時代だったと言われています。戦って、領土を広げ、発展して行きました。しかし、21世紀に入り、地球にも限界があり、戦い続けても終わりがないことが分かってきました。それならば、人同士、国同士が繋がって共存共栄して行く時代を創らなければいけません。その時に女性的感覚が果たす役割が重要になってくると感じています。

資本主義が行き過ぎて、資源も使い果たし、大量にある核兵器が一個でも爆発するとみんな死んでしまうかもしれないという状況を止めるのは、「次世代に何を遺したいの？」、「競争だけではなく、繋がって一緒に創って行く方が、結局、生存確率が高まるんじゃない？」という女性的な発想ではないでしょうか。そこから次の時代のあり方が見えてくるのではないかと思います。

そういう意味で、女性が女性の持っている感性を素直に出して行った方が、新たな時代は築きやすいと思います。なかなか面白い時代に生まれて来たなと思っています。

（文責　編集部）



①ドリームマップを作成して、夢の実現に向けて話し合う。

②フィリピンメンバーとのダイアローグの様子。

③プログラムを終えて、ロレガ地区のメンバーと記念写真。